



# サンクチュアリ

12月28日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 12月28日のおはなし「サンクチュアリ」

鳥のさえずりに目を覚ます。キョロロロロと鳴き交わしているのはカイツブリだ。営巣をしているのに違いない。ゆっくりと目を開く。あたりがあまりに眩しくて自分がどこにいるのかよくわからない。そして思い出す。ここは野鳥公園だ。東京の臨海部にもうけられた野鳥達のサンクチュアリだ。ここに来るのは何回目だろう。懐かしい。とても懐かしい。

よく晴れた日。こんな太陽を見るのはいつ以来だろう？ 青空はどこまでも高くうすく刷毛ではいたような雲は白く輝いて見える。バードウォッチングの会なのだろうか、老人達がカメラや双眼鏡を首からぶら下げてぞろぞろと歩いていく。カラフルなアウトドアウェアを着て、やや早口に若やいだ調子でがやがやと話しているので聞こえる。

「野鳥を見にきたんだか、飛行機を見にきたんだか、わかりませんね」誰かがいう。なるほどやかましいジェット音をまき散らしながら飛行機が飛んでいく。その音に思わず身体が堅くなるが、目にうつるのは機体に派手なペイントを施したジャンボ機だ。そのペイントが何かわかって思わず吹き出してしまう。ポケモンだ。ポケモンジェットだ。そしてなぜだか涙がこぼれてしまう。

身を横たえていたベンチから身を起こすとすぐそばを小学生くらいの少女が通る。ここは公園内に設置された観測所のひとつだ。野鳥から身を潜めて、据え付けられた望遠鏡や手渡された双眼鏡を使って、鳥の生態をじっと観察できるのだ。斜め前には三脚が据えられ、天体でも観測できそうな望遠鏡にコンパクトなデジタルカメラが取り付けられている。

「おんぶしてるよ！ ヒナがお母さんの背中に乗ってる！」

少女が声を張り上げる。

「ほんとう？ おんぶするんだ」

もうひとりの、少し年上の少女が応じる。背の高い男が倍率の高そうな双眼鏡を手に話している。

「おんぶして泳いでいるね。あれは生まれて5日くらいのヒナなんだよ」

彼のことは知っている。彼はここで何日もカイツブリの親子を観察している青年だ。頭がはっきりしてくる。傍らを妻が通り過ぎ、小さな少女が——いまではもう次女だとわかっている少女が「おかあさん、見て見ておかあさん！」とせかす。長女は自分の双眼鏡を握りしめじっと何かを見つめている。たぶん、別なカイツブリの親子だ。そこには今日孵ったばかりの2羽のヒナと、まだ孵らない2つの卵があるのだ。

そして——そしてぼくがそのそばに立ち、何かを話しかける。長女が笑う。ぼくは次女の方に移動する。2007年5月3日。憲法記念日。何もかも思い出す。その日ぼくたちは野鳥公園に来て、そして羽田の方で起こった騒ぎに遭遇したのだ。それがすべての始まりだった。結局、その先四半世紀が経過してもなお謎の事件とされる空爆は、当時ただちに日本の憲法記念日を狙った隣国の武力攻撃と断定され、日本は急速に右傾化した。

超法規的手法で憲法が「改正」され、自衛隊などという歯に衣を着せた表現はなくなり明快に「軍隊」と定義され、アメリカとの軍事同盟を強化し、その結果、みるみるうちに世界中から孤立していった。合衆国を標的とするテロの対象の一環に常に加わるようになり、「テロに対する断固たる姿勢」を貫いた結果、どこの国とも戦争状態にないにもかかわらず日本は戦時と呼ぶしかない状態に陥った。

タイムトラベルが可能になると、我々は繰り返し過去に干渉を開始した。もちろん、許可のないタイムトラベルは違法であって厳しく取り締まられていたし、法律だの取り締まりだの以前に、過去をいじくり回すなどとんでもない行為なのは分かっていた。けれどぼくにはもう何も残っていなかった。カイツブリの親子に夢中だった子ども達も、長く連れ添った妻も理不尽に命を奪

われ、とてもじゃないが働く気になれずいつしか仕事も失い、その間にあちこちに発表した発言が元で官憲に追われる立場となり、ちょっとした知り合いは離れていき、大切な友人からは彼らの身を守るためにも離れるしかなくなった。

過去をいじりまわしちゃいけないだって？ タイムパラドックスを引き起こす無責任な許されない行動だって？ 笑わせてくれる。ぼくの未来を完膚なきまでにめちゃうちゃにしておいて、よくそんなことを言えたもんだ。ぼくは好きなように過去をいじる。いじり回すとも。カイツブリの親子を眺めていた親子が、もっと長く人生をともに過ごせるように。

ここには何度も来た。家族と過ごしたあの日以外に何度も。時空作業員としての仕事の合間に個人的に何度も足を運んだ。2007年5月3日野鳥公園。忘れられない場所。平和だった最後の1日。遠くから家族を見守り、それからまた工作に戻った。何度も訪れるうちに、やがてぼくがすぐそばにいても、もう家族の誰もぼくに気づかないことがわかった。それほどぼくは年を取り、形相が変わっていたのだ。

いま何とか、戦争をしないでしのげるはずのところまで過去を変えた。でもその先はどうにもうまくいかない。いつまでたってもきな臭い話は後を絶たない。危険な政党を骨抜きにすると、代わりに別な政党が暴走し始める。何人もの政治家を失脚させたが、穴埋めするように別な人間がタカ派のポジションを占めていく。権力を握ると人は戦争をしたくなるらしい。

でも、もうこの日、2007年5月3日に羽田の事件は起こらないはずだ。そして、あの事実上の戦争が始まることもないはずだ。明日も、恐らく1年後も、大丈夫だろう。その先のことは分からないが、少なくともあの一連の戦乱は回避できるだろう。ぼくの、このぼく自身の家族は二度と戻らなかったが、いまここにいるこの家族にはきっと違う未来が待っているはずだ。

「大丈夫ですか」

またうとうとしていたらしい。声をかけられて目を覚ます。下の子がベンチに横たわるぼくを覗き込んでいる。いや。この子は厳密な意味ではぼくの次女ではない。あそこにいるもうひとりの若いぼくの娘だ。見ると次女の背後には上の子も立っていて心配そうにぼくを、年老いて変わり果てたもう一人の父親を見ている。

「ああ。大丈夫。寝ていただけだよ」わたしは返事をする。もっと話をしたい。もっともっとたくさん話をしたい。これでもう最後なのだから。でもそれはすべきでない、と何かが引き止める。わたしはあくまでも見知らぬ老人なのだ。それでもこのことだけは言っておこう。「わたしはね、遠くから旅をしてきたんだ。これでもう最後の機会と思ってね、どうしてもここに来たかったんだよ、ここにね」

姉の方がぼくをじっと見て何かを言いたそうにするが、向こうから若いぼく自身が娘達を呼ぶ声がある。余計なことをする自分だ。二人は恥ずかしそうな笑みを浮かべてぼくに一礼すると向こうに駆け去ってしまう。確か、あっちにはネイチャーセンターがあるんだっけか。入れ替わりにさっきの老人達がぞろぞろと戻ってきて、望遠鏡を囲んでひとしきり騒ぐ。それを聞きながらぼくはまた眠りに誘われていく。

「憲法改正なあ？」

遠くから声が聞こえてくる。その後の言葉がおかしかったらしく老人達の笑い声が聞こえる。ぼくも少し笑う。すべてこの世はこともなし。

(「憲法改正なあ？」 ordered by オネエ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## サンクチュアリ

<http://p.booklog.jp/book/41353>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41353>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41353>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.